



近年、施設園芸において、光合成産物の増加による増収を目的とした環境制御技術の開発が全国的に進んでいます。本県のイチゴ栽培においても、さらなる増収による農家所得の向上を目指して気象条件に応じた環境制御技術の導入を進めています。その環境制御技術の一つとして、日射量に応じてかん水量を調整する日射比例かん水法が施設園芸の分野において導入されつつありますが、本県のイチゴ栽培における日射量に応じた最適なかん水量は明らかになっていません。

そこで、長崎県型高設栽培

で、本県の主要品種「ゆめのか」を用いた日射比例かん水

イチゴ栽培の環境制御

日射量に応じかん水最適化で収量増加

法が収量に及ぼす影響について調査しました。

その結果、日射量1MJ/平方メートルにつき株当たり37リットル以上かん水すると、3月から6月にかけて商品果収量が多くなる傾向となり、総収量が600キログラム程度の収量が得

かん水量の違いが収量に及ぼす影響(2019年と2020年の平均)

かん水量 (ml/株/MJ)	6月までの総収量 (kg/a)	商品果収量 (6月まで) (kg/a)	月別商品果収量(kg/a)	
			2月まで	3~6月
9.3	422	383	217	176
18.7	548	513	245	273
37.3	603	563	243	327
74.6	583	542	237	316

られました。

このようにイチゴでは、日射量に応じてかん水量を最適化することで単収の安定、向上が期待できます。

(長崎県農林技術開発センター 農産園芸研究部門 野菜研究室 研究員 峰孝介)